

## 本書の刊行に寄せて

東京大学教授 藤原克己

本書は、上海の同済大学副教授李宇玲さんが、二〇〇五年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文を礎稿とし、その後に表示した論文や新たに書き下ろした章を加えて一書にまとめたものである。

書名の示すとおり、本書は奈良・平安朝の宮廷文化において中国文化がどのように受容されていたかということを中心として、著者は、日中両国の史料を精査して、奈良・平安朝の宮廷文化の根底には唐代宮廷文化の、従来考えられていた以上に真剣にしかつアツプ・トゥ・デートな摂取があったことを克明に浮かび上がらせた一方で、また、そうした中国文化の受容の相だけでなく、その日本化の様相にも光を当てている。

本書は、新見に富んだきわめて水準の高い専門的学術書であると同時に、良き入門書、研究案内書でもある。それは、個々の論が広いパースペクティヴに立脚していること、叙述が

懇切にして明快であること、そして先行研究への目配りが実に行き届いていて、日本と中国双方の最新の研究にも行きわたっており、個々の問題に関する研究史を把握し、研究文献を知るうえでもたいへん役に立つであろうからである。

とくに、本論の第一章に「風流と遊宴」の章が据えられていることの意義を、私は大いに強調しておきたいと思う。

はじめは儒教的な「教化」や「徳化」といった意味に近い言葉であった「風流」が、老荘的な清談を、山水の逍遙を、さらには詩と音楽の場としての遊宴や妓女との交遊なども包み込むようになり、やがて天子の宮廷文化のありかたをも規定するようになった。このような「風流」の語義変化は、漢代、六朝前期、六朝後期、唐代という時代を追っての中国の政治社会史と文人の精神史とを集約していることを、著者は先行研究をも丹念に整理しつつ、簡明に解きほぐしている。政治の中心にいる天子が、政治を超脱した風流を志向するということ。そして宮廷という場が、君臣間でそのような風流を共有する場となるということ。しかもその風流のなかには、女性に対する艶情も含まれるということ。このように要約すれば、「風流」はまさに日本の奈良・平安朝の宮廷文化の形成にも深く関わるものであることが容易に想像されよう。さて著者はこのようなパースペクティヴを提示したうえで、続く第二章

「風流と踏歌」において、天平年間（七二九〜七四九）の宮廷踏歌は、盛唐・玄宗朝開元年間（七一三〜七四二）の踏歌を取り入れたものであろうとし、「美也備」の用例を含む大伴旅人の「梅花歌三十二首」の宴（天平二年）にもその影響を指摘するとともに、総じて天平期の文献に散見する「風流」に、盛唐・開元期の唐詩に頻出する「風流」のいちはやい反響を聴き取るのである。

第II部「平安朝の宮廷文学と省試詩」前半の第三・四章では、平安朝の文章生試に課された詩は、詩題・形式ともに唐の科挙・進士科に課された詩（省試詩）に倣ったものが多いこと、文章生試だけでなく平安前期（醍醐朝・延喜年間以前）の宮廷詩宴の詩題にも、省試詩のそれを模したものがあること、また文章生試では進士科と異なって賦は課されなかったが、菅原道真が宇多天皇の制に依じて作った「未旦求衣賦」は進士科で課された賦に形式がよく似ていること、のみならず、奇しくも道真作より後に唐の進士科でも「未明求衣」の賦題が課されていること等々の興味深い事例を指摘し、平安前期の日本がかくも熱心に唐代進士科の省試詩を学び、詩によって人材を扱ぼうとしていたこと、また事実平安前期には文章生出身の有能な文人官僚の活躍が見られたことに注意を喚起したうえで、著者はさらに日中の政治、宮廷、文学のあり方を比較する、より広やかなパースペクティヴに立って、一つの重要な問題を提

起している。すなわち、唐代の詩人たちにとって省試詩は、自己の志や感懷を詠むという詩の本来のあり方からは乖離したものと見て軽視され、詩人のその後の創作営為ともほぼ無関係なものであったのに対し、平安朝の文章道の基本的な性格は宮廷詩人の養成にあり、文章生試の詩と宮廷侍宴詩とは直結していた、ということである。

ここからは、彼我の文学において「宮廷」という場が占めていた大きさの決定的な違いということに思い至らざるをえないであろう。従来、唐の宮廷詩宴は盛唐以降は衰退したと考えられていたのに対して、中唐の徳宗朝にもその再興が見られたことが本書の第七章では指摘されるのであるけれども、それにしても、唐代を通して文学創作の中心的な場が宮廷であったとは言い難い。しかし平安朝を通して一貫して宮廷は、漢詩のみならず和歌や仮名散文も含めて、文学創作の求心的な場であり続けたわけである。この違いは、白居易の『白居易集』には一篇の侍宴应制詩も見られないのに対し、菅原道真はその詠作こそ己れの本領と考えていたという点にもあらわれている。

第五章「菅原道真と省試詩」は、省試詩（文章生試の詩）と宮廷詩とが直結していたありようを、『菅家文章』に収められた省試詩の習作からうかがうとともに、そうした詩作とは対照的な古体詩に、道真が独自の表現世界を見出していたことを明らかにし、この詩人の幅広さと鑿深さを浮き彫りにしている。

さて、以上のような省試詩に関する綿密な研究の積み重ねの上に書かれたのが第六章「夕霧の学問」である。『源氏物語』少女巻の、光源氏の子息夕霧の大学入学をめぐることは、そこに「なほ才（漢才）をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ」という光源氏の有名な言葉も見られることから、さまざまな議論がなされてきたものの、著者も言うとおり、「個々の場面を織りなす儀式の内実はほとんど俎上にのぼせられることがなかった。なぜ夕霧の元服の儀は三条の宮で、字（むな）を付ける儀式は二条東院で行われたのか、入学の儀はどこで行われたのか、またそもそも史実に照らせば、元服は大学寮入学の必須条件ではなかったにも関わらず、なぜ光源氏はまだ十二歳の夕霧を入学に先立って元服させたのか。著者は物語の本文をこまやかに読み解きながら、これらの点に、光源氏の漢学尊重の姿勢をきわやかに描き出すための作者の行き届いた配慮があることを明らかにしている。物語の行文から、一挙に物語世界が奥行きのある立体的な空間として浮かび上がってくるのを覚えさせるような好論である。論の後半で、夕霧の受験する冷泉帝の朱雀院行幸の際の放鳥の試について、『うつほ物語』吹上・下巻で藤原季英が受験する朱雀院の神泉苑行幸の際の放鳥の試とともに、その先蹤が寛平八年の宇多天皇の神泉苑行幸に際して行われた省試に求め

られることを指摘したこともきわめて重要である。

第Ⅲ部「平安朝の宮廷文学と遣唐使」は、平安朝の宮廷詩宴の隆盛に関わった遣唐使のはたらきを、重陽詩宴を中心として考証したものであるが、とりわけ興味深く、感動的でさえあるのは、第七章「重陽詩宴と遣唐使」の、嵯峨天皇が中唐の徳宗帝を範として敬慕していたことに論及した一節であろう。徳宗朝（七七九〜八〇五）は日本の桓武朝（七八一〜八〇六）とほぼ重なり、その間に遣唐使は二回派遣されており（奈良朝最後の遣唐使と、菅原清公、空海ら平安朝最初の遣唐使）、それぞれ徳宗朝の発足期と最晩期にあたる。そして空海から嵯峨天皇に「徳宗皇帝真跡一卷」が献上されている。また嵯峨天皇の諡号となった嵯峨院の地名も、徳宗帝の陵墓がいとなまれた嵯峨山にちなむものである。徳宗帝が宮廷詩宴の復興に努めたことが、まず嵯峨天皇の範となったわけだが、後者の薄葬遺詔も前者のそれに倣ったものではないか、と著者は指摘する。ちなみにこの嵯峨遺詔については、私もやや詳しい注解を試みて、その行文にみなぎる厳肅莊重な気迫のようなものに心打たれたことがあるのだが（拙稿『続日本後紀』の嵯峨遺詔、池田温編『日本古代史を学ぶための漢文入門』吉川弘文館、二〇〇六年所収）、けだし李さんもまた、嵯峨天皇に深く心惹かれるところがあるに違いない。第八章「嵯峨天皇と重陽詩宴」は、嵯峨天皇（上皇）の重陽詩賦作品を時系列上に置いて、その時々々に彼が置かれていた状況からそ

の心境にまで踏み込んで表現分析を行ったものであるが、この詩人天子に対する共感と敬愛が行間にはじみ出た論である。

最終章「唐代と平安朝の宮廷文学」は、日本の平安朝宮廷文学における女流文学の開花ということから、対比的に中国文学における女性作家に光を当てたものである。唐の宮廷文学においても、女流詩人の活躍は見られたし、また宮廷文化に女性の存在は不可欠であったというところが、まず前半で論じられているが、ここで本書第一章の風流論が想起されよう。そしてまた、本書全体を通して繰り返し照らし出されてきた問題、すなわち、唐代を通して宮廷が文学創作の中心的な場であったとは言い難いものに対して、日本のばあいは平安朝を通して一貫して宮廷は文学創作の求心的な場であり続けたという違いも思い合わせよう。また、唐代においては女権が伸張し、女性の教養も高まっていたので、文学の享受層における女性の重みは増していたろう、それが中唐の恋愛文学の開花にも大きく関わっていたであろうという、興味深い問題にふれられていることにも留意しておきたい。たしかに、それはもはや宮廷文学の問題ではない。しかしながら、平安朝の宮廷文学を、唐代の宮廷文学とのみ比較するのでは、ほんとうの比較文学研究にはならない。唐代文学の、宮廷文学を超えた広がりをも視野に入れてはじめて、平安朝宮廷文学の特異なかたちが見えてくるのではないだろうか。

はじめにものべたように、本書は新見に富む専門書であると同時に、良き入門書、研究案内書でもある。奈良・平安朝の文学や文化に関心のある人々に、また日本古代史や中国の古典文学に関心のある人々にも、ぜひ読んでいただきたいと願い、私の興味と関心に偏ってしまつたところはあるが、やや立ち入った内容紹介を試みたしだいである。

## 序 章——本書の問題意識と方法——

本書は「宮廷」を視座に、唐代文学との相關関係をとおして、平安朝文学の内実と本質について考えるものである。

本書ではおもに平安前期をあつかうが、出典の考証や特定の詩人の考察にとどまらず、また中国文学からの一方的な影響を云々するのではなく、文化交流史の視点から、中国文化受容のさまざまな位相を動態的にとらえたい。うえで、平安朝文学の特質と意義について明らかにしていきたい。

上代や平安朝における中国文学の影響については、これまで小島憲之氏の精緻な考証をはじめとする幾多の研究によって、膨大な数におよぶ漢籍の典拠と受容の事例が指摘されてきた。これら先行研究により、類書のたぐみな利用や、白居易の詩の流行など、古代日本がいかに中国文学と出会うことによつて、じよじよにみずからの表現の世界を立ち上げていったか、その過程の細部がひじよように丹念に再現されている。こうした発掘作業はデータベースの充実にともない、今後さらさらに深められてゆくことだろう。

だがそのいつぼう、研究の専門化・細分化にしたがい、個々の受容がいかなる文化的背景のもとにおいてなされたものかという大局的な視点が、かえって欠如しがちになっていることも否めない。そのため、昨今の和漢比較研究は、閉塞的な状況に直面しているともいえよう。いまこそ、文学作品の背景にひそむ広範な歴史的経緯に

目配りしつつ、思想・時代・環境をトータルに見据えた検証がもとめられるのではないか。

たんなる漢籍の用例や典拠からの影響を究明するという、ばくぜんとした超時代的な考証に終始するのではなく、どの典籍、どの言説をどういう文脈をへていかにしてとりこんだかについて掘り下げていく。こうした跡づけの作業をおして、よりゆたかで複層的な受容史が浮かび上がってくるはずである。また、それが同時に唐代と平安朝それぞれの文学的特質を問いなおすきっかけにもなる。これがいわば、本書の基本的な姿勢である。

かかる観点から、本書はⅠ「奈良朝天平期における風流の受容」、Ⅱ「平安朝の宮廷文学と省試詩」、Ⅲ「平安朝の宮廷文学と遣唐使」の三部から構成される。以下、各章の論旨にふれるまえに、いくつかの問題について確認しておきたい。

## 一 なぜ、宮廷文学か——同時代的考察の可能性

まず、宮廷文学の定義について。本書では広義的に、「宮廷を舞台に製作された作品」と「宮廷において享受された作品」の双方をふくみうる概念としてとらえる。周知のように、平安朝の文学は宮廷社会を中心に展開されている。たとえば、平安初頭に編まれた勅撰三漢詩文集や、王朝漢詩の最高峰ともいえる『菅家文章』をひもとくと、その大半を占めているのは、天子の遊宴や行幸の場で詠まれた侍宴応製詩である。また、仮名文学の世界をのぞいてみても、そのほとんどが宮廷貴族の手によってつくられたといつてよい。このように、上代や中世とは異なり、「宮廷文学」は平安朝文学の中核をなしているのである。

では、平安朝の宮廷文学はいかにして構築されたのか。日本の古代国家は唐から大量の文物制度をとりいれることをとおして、「東夷の小帝国」<sup>①</sup>を築き上げようとしていたのであったことにかんがみれば、それがけつして自国の殻に閉じこもつての営為ではなかったことは、もはや自明である。したがって、唐代の宮廷文学を視野におさめることなしには、平安朝の宮廷文学を十全に把握することはできないであろう。本書のそもその出発点は、ここにある。

だが、平安朝と唐代の宮廷文学の関係について考えるさい、つねにつきのような見方に逢着してしまう。つまり、中国では初唐以後、侍宴応製詩は詠まれなくなったという見解である。この説にしたがえば、「宮廷文学」という共通のファクターをおして両国の文学にアプローチしようとすると、いきおいその視線は初唐にばかり向けられる結果になる。これまでの研究でも、おおむね初唐の漢籍を手がかりに、太宗宮廷の影響を分析する論考がおこなわれてきた。しかし、はたしてそのような理解でいいのだろうか。

いったい、詩経以来の伝統的な「言志」の文学観が根ぶかく息づく中国社会では、宮廷文学じたいにたいする評価は概して低い。詩とは感興のわくままに賦するものであり、君徳をたたえる、政権讚美色のつよい侍宴応製詩は詩の本義から乖離した、虚飾の文学と考えられている。<sup>②</sup>とくに唐詩の場合、ふつう初唐・盛唐・中唐・晩唐の四期に区分されるが、盛唐から大きく花開き、やがて主流の座を獲得していった在野の文学にくらべ、初唐の宮廷侍宴詩は長きにわたり、その洗練された様式をのぞき、ほとんど顧みられる価値のない存在とみなされてきた。

かかるイメージが先行したため、華やかにくりひろげられ、律詩の完成に大きく貢献した初唐の宮廷サロンならまだしも、盛唐以降しだいに衰微の一途をたどっていく宮廷詩に関しては、もはや一顧だにされずに忘れ去られてしまったのである。中唐では宮廷文学がいかに展開されたかの問題となると、個々の詩人論において多少ふれられることがあっても、文学史の流れによりそつてその全体像を描出しようとする作業は、ほとんどなおざり

にされてきた。

そして、従来の和漢比較研究では、唐代文学に言及するさい、ほぼ中国文学研究の領域（ここでは日本の中国文学研究をさす）における既存の枠組みと常識をふまえて、両者の共通点と相違点を析出しようとする方法が多く採られてきた。が、そもそも、戦後日本における中国文学研究は、戦前・戦中にたいする反省もあり、中国本国からの影響を少なからず受けている。この点は、とりわけ唐の宮廷文学のとりえ方において顕著にみられる。すなわち、初唐以降の宮廷文学への注視は、日本側の研究においてもほとんどなされていないのである。

だが、儒教をもとに国家づくりが進められていた古代中国で、宮廷社会の根底に横たわっている文化的理念は、皇位や王朝の交替によって大きく変化するものだったであろうか。答えはむしろ、ノーである。じつさい、清朝の絶頂期に君臨した乾隆帝（一七一一～一七九九）に四万一千八百首にもものぼる『御製詩集』があるように、異民族の統治にもかかわらず、宮廷文学の繁栄こそ、無為垂拱の明君の治世を象徴するにもつともふさわしい文化事象であるという観念は、伏流水のように沈潜しながら、脈々と受けつがれている<sup>③</sup>。とすれば、同じ唐王朝において、安史の乱をへて、中唐では往時の栄光をとりもどそうとさまざまな再興策が打ち出されたなか、宮廷文学に復興のきざしがまつたくみられなかったのか。おのずと疑問がわいてくる。

いっぽう、八世紀から九世紀にかけて、ちょうど安史の乱をはさんで、盛唐から中唐へと移行していく時期だが——日本でいうと、奈良天平期から平安前期にあたる——度重なる遣唐使の実施を中心に、唐日のあいだに朝廷間の交流がひんばんに進められていた。遣唐使はたんなる文化的使節ではなく、唐の皇帝に朝貢品を献上し、外交関係を確認する政治的役割を同時にもつていたことが明らかにされている<sup>④</sup>。彼らが唐でおこなったもつとも重要な活動は、正月の朝賀をはじめとする各種の儀礼であった。

こうした実地見聞の体験がやがて、奈良朝から平安朝にかけての宮廷儀式や年中行事の成立と展開に大きくつなげたことは、近年の史学研究によって詳細に復元されている<sup>⑤</sup>。いっぽう、漢文学生成の見地からいうと、この時期はじつはとりもならず、漢詩を軸とする宮廷文学の創成期でもあった。神亀三年（七二五）の玉来宴を初見とし、嵯峨朝に入ってから一気に整備された宮廷詩宴の歴史は、唐の朝廷との緊密な交流がはかられていた時代を背景につむぎだされたものにほかならない。

このようにみえてくると、奈良朝から平安朝の宮廷文学において、同時代の唐の宮廷からの影響もじゅうぶんに考えられるのではないか。こうした設問は、平安朝文学の内実を説明するだけでなく、唐代の宮廷文学の意味を従来の視野とは異なるパースペクティブから読みなおすことでもあり、ひいては新たな文化交流史の発見にもつながるはずである。いま一度、宮廷文学にたいする既成の観念にとらわれることなく、作品に真摯に向かい合い、諸資料を見据えたいうえで、同時代的文化交流のダイナミズムをねばりづよく追いかけてみることにしよう。

## 二 遣唐使がもたらしたものの——歴史と文学のはざま

延暦十三年（七九四）十月、平安京への遷都がおこなわれた。つづく翌年の正月十六日に、群臣をまねいた祝宴の席で、新京の落成をことほぐ踏歌が披露された。このときにうたわれた踏歌の歌辞（七言絶句）が『類聚国史』（巻七二）に四首伝わっており、一段ごとに「新京（年）楽。平安楽土。万年春」のリフレインが入り、漢音でくりかえし斉唱されたものとみられる。

よく知られるように、正月十六日の踏歌は唐の宮廷儀礼からとりいれたものである。また、日本で演じられた

のは、このときが最初ではなく、聖武天皇の天平二年（七三〇）正月十六日に、すでに正式に宮廷行事として発足していた（『続日本紀』）。だが、日本古来の音曲を演奏する天平期の宮廷踏歌・歌垣と趣向が大きく異なるのは、平安京の空にひびきわたった歌声が漢音によるものであったことである。その七言絶句の歌詞といい、新たな時代の幕開けをつげる意思表示といい、延暦十四年の新春踏歌はじつに、唐の先天二年（七二三）のそれを彷彿させる演出となっている。

唐の先天二年の正月十五夜、さまざまな意匠をこらした燈火のもとで、きらびやかに着飾った宮女たちが宮中から長安の町に練りだして、踏歌を奏し、玄宗と官民一同がその見物に興じた（『旧唐書』卷二九、嚴挺之伝）。元宵の観燈行事は唐代を通じて盛んであったが、なかでも先天二年のものがとりわけ贅美をつくしたといわれ、その背景には、前年の玄宗の即位にもなう太平の世の到来を言挙げする意図が託されていたと看取される。現存する史料や文献に唐の宮廷踏歌に関する記述が、この回のものしかみられないことも、そのことに盛大であったようすを物語っているよう。

国際都市長安のこの最先端の流行は、当時唐に滞在していた遣唐使たちにより、いち早く日本にもちこられた。天平二年、光明子が新皇后として迎えたはじめての正月十六日に、聖武天皇の移幸にともない、皇后宮に向かつて発進した百官の踏歌の大行列はまさにその再現といえる。このようなほぼ同時代的に進行している宮廷踏歌の受容は、律令体制を根幹に据えながら、唐にならって礼楽や朝儀を整備し、大唐帝国と同様の文化国家づくりをめざす施策の一環として位置づけられよう。さらに巨視的にみると、律令制を推進しようとする七世紀後半から平安朝にかけて、唐の制度および文化、文学の摂取の流れは、和辻哲郎氏が「天平時代末期から弘仁初期にかけての変遷は、漸を追うものであって、どこにも境界線はない」とのべたように、あいつぐ遣唐使の派遣事

業によってささえられ、おおかた分断されることなく一貫してつづいていた。

そして、平安なるべき永遠の王都を祈念するにふさわしい演出として、踏歌がえらばれたのも、こうした奈良天平期以来の唐風政策の延長線上にあるものにほかなるまい。と同時に、伝統的な曲目を使用するのではなく、玄宗宮廷の踏歌詞を模して、漢詩の歌辞を新作するところに、それまでのどの時代よりもいつそう唐、それも盛唐に擬した壮大な王朝をつくろうとする桓武朝の並々ならぬ意気込みがよく反映されているといえよう。漢語による踏歌は、かつて風巻景次郎氏がいみじくも説いたように、外来文化の咀嚼という面において、「もはや律令や皇城の構想や朝廷の礼服が唐代の制度を多く摂ったというような、物質的な一面ばかりにとどまるものではなかった」のである。それは、やがて来るべき平安宮廷における和歌の衰退と漢詩文の繁栄を予兆する画期的なできごとであった。

この宮廷踏歌とともに、天平期には唐礼一百三十巻や経論五千余巻をはじめとする大量の典籍が、吉備真備や玄昉ら遣唐使たちによって日本にもたらされた。だが、精力的、かつ体系的に唐の文物を輸入しようとした彼らにくらべ、平安朝の遣唐使の場合、文化面におけるその貢献度は、おもに仏教界のめざましい発展に注目があつまっている。すなわち、最澄や空海による最新仏教の伝来である。それ以外の分野に関しては、菅原清公が学者として大成したことや琵琶の名手である藤原貞敏などの例のように、個人の学芸次元の問題としてとらえられるケースがほとんどである。

というのも、『続日本紀』とうってかわり、平安朝の国史類に遣唐使によって将来された文物に関する言及が「彩幣、綾、錦、香葉」にとどまっているからである（『日本紀略』大同二年正月）。だが、史料の分析だけでなく、同時代の両国の文学テキストの解説をとおして、平安朝の遣唐使の活躍に新たな光をあてると、これまでペール

に包まれていたその実態が少しづつ姿をあらわしてくる。個別の研究が精緻化するいま、知識の共有をめざして近隣諸学の連携がいわれてひさしいが、歴史学と文学のあいだに依然として方法論的な溝が横たわっているようにおもわれる。伝統的な「学」の境界（歴史学と文学、中国文学と日本文学）を越えてこそ、はじめて古代の共時的世帯がよみがえってくるのであろう。

### 三 宮廷詩人と律令官人——ふたつの省試

唐帝国を最盛期にみちびいた玄宗朝から移入した文物制度はむろん、踏歌のみではなかった。盛唐に範をあいだもつとも象徴的な文化政策のひとつに、科擧の進士科試験をまねて、詩賦を課する文章生試を採用したことがあげられる。というのは、平安朝漢文学の主たる担い手はほかでもなく、文章生出身の官僚文人であったからである。しかしながら、これまでなぜ桓武朝において文章生試がはじめられたのか、そしてなぜ試験が唐の進士科のように詩賦形式によったかなどについて、あまり議論されていないようである。

その大きな原因としてまず考えられるのは、関連の文献記録が散逸したことである。そのため、文章生試導入の背景について、桃裕行氏が人間の共通の美的感情にうったえる三史や『文選』などが教科書としてもちいられたことや、公文書の作成における漢文の実用性などにより、文章科への貴族の関心が高まり、定員以上の入学希望者があらわれたことに起因すると指摘して以来<sup>10</sup>、史家のあいだでこれがほぼ通説となっている。だが、漢語の踏歌の一件に端的にあらわれているように、徹底した唐制の模倣を志向する桓武朝という時代背景を念頭に入れて考慮すると、唐の科擧の形式をふまえた文章生試の導入を、はたして従来のような見方ですらえていいのだろうか。

現存の史料から文章生試が確認できるのは、延暦八年（七八九）の菅原清公の例が初見である（『続日本後紀』承和九年十月十七日条）。また、『経国集』巻十四に南淵弘貞の「奉試詠梁」がおさめられており、延暦十五年（七九六）の文章生試の答案と目される。一連の資料を総合してみると、文章生試が実施されたのは、桓武朝に入ってからであり、しかも発足当初から、試験形式が「詩もしくは賦を試みる」（弘仁十一年太政官符）とさだめられた可能性が高いと推測される。このような詩賦形式の試験は明らかに唐の進士科の先例を参照したものであるが、唐代ではそれが定制になったのは、玄宗朝の天宝十年（七五二）あたりからとされる。つまり、唐に遅れることわずか三十年あまりにして、平安朝においてはやくもとりいれられたのである。

また、その撰取がたんなる形式の借用にとどまらなかったことは、それまで史上に名をのこす文章生がごく稀だったのにたいし、文章生試の導入にともない、朝政に参与するいっぽう、宮廷詩人として天皇の遊宴にはべり、詩賦を競作する文章生出身の律令官人が輩出するようになったことから明瞭にうかがわれる。彼らはいわば、唐の科擧出身者さながらの面目躍如たる活躍を果たしていたのである。このような政治と文学のありかたは、詩賦の優劣によって有能な人材を選抜する唐の進士科の理念とかなり相似した面があるともみるべきであろう。

さらに、嵯峨朝になると、この文化路線はより推進され、弘仁十二年（八二二）について、文章博士の位階が従五位下にまでひきあげられた。文章博士の唐名がのちに翰林学士と称されたように、もはや大学寮の教官といふだけではなく、天子に近侍し、政治の諮問にあずかる使命を与えられたのである。やがて文章道出身の学儒が、唐の科擧出身の新興官僚層のように朝政に参画する可能性は、右大臣にまでたどりついた菅原道真によって最大限までたけられたと同時に、その失脚に象徴されるように、やがて終焉したのであった。

このようにみてくると、九世紀までの古代日本は積極的に制度文物を輸入することをおして、唐王朝と同質の文化を共有しようとする、一種の擬似大唐帝国の様相を呈していたといえよう。とはいっても、そこから生まれた漢文学は唐のそれと同質のものだったのだろうか。

両者の大きな違いとして、『晋家文章』に待宴応製作が大量に収録されているのにたいし、『白氏文集』にそれがほとんどみられないことはよく知られている。こうした多様な受容の背景には、どんな文化的要因が潜在していたのだろうか。この問題を考えるうえで、ほぼ同じ制度にもとづいて生み出された省試詩の比較をおして、その真相にせまってみるのは、必要不可欠な視点のひとつといえよう。

#### 四 「国風暗黒」の再検討

さて、平安初期に『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』という三大漢詩文集があいついで編纂された時代のことを、文学史のうえで「国風暗黒時代」と呼ぶことが多い。小島憲之氏によれば、この呼称を最初に学界に流布させたのは、師の吉沢義則であつたらしい。<sup>11)</sup> もっとも、国風や国風文化という概念がひんぱんに語られるようになったのは、さらに明治時代の「国文学」形成期にさかのぼらなければならぬだろうし、またそこに近代日本における「国文学史」の成立問題も自然とからんでくる。が、その詳しいいきさつについては先行研究にゆだね、ここでは宮廷文学の視点から、勅撰三集の時代はたして「国風」が完全に暗黒だったのかについて、あらためて見つめなおしてみたい。

弘仁五年（八二四）から天長四年（八二七）にかけて、わずか十数年のあいだに勅撰三集があいついでなり、弘仁九年（八二八）には朝会の礼法、男女の常服から都の諸門閤名にいたるまで唐式にあらためられ（『日本紀略』）、宮廷文化は唐風一色にうるわしく塗りがえられたのである。林鶯峰が「本朝詩章の盛、此時に過ぎたるは無し」（『本朝一人一首』巻三）と評するほど、漢詩文芸が大きく開花し、和歌が公式の場から姿を消した。今日の近代的な価値観からみると、こうした唐風一辺倒の時代はかなり異様に受け止められるのかもしれない。だが、あくまで唐帝国を中心に国際秩序が構築されていた当時の東アジア文化圏においては、かかる現象はけっして日本独自の傾向ではなく、濃淡の差はあるものの、唐周辺の国々においてほとんど共通してみられたのである。

ともあれ、同じ儒教的政治理念にもとづき、律令制の構築と再建を実行してきた古代中国と日本が、けっきょく異なる歴史を閲するにいたつたように、唐の宮廷文学を手本にしながら成長しはじめた平安朝の文学もまた、独自の展開を遂げるようになった。両者の分岐点はいったいつ、どこで生じたのだろうか。その淵源をたどつてゆくと、それはまぎれもなく「国風暗黒」といわれるこの時代にたどりつくのである。

勅撰三集におさめられている個々の作品をひもとくとわかるように、唐の文学をつよく志向しながらも、しだいに唯美的・情趣的世界へといちじるしく傾斜していった一面が明確にみてとれる。比喩などの技巧を多用し、繊細な描写にこだわる詩風はやがて古今集の歌風の確立につながっていくが、<sup>13)</sup> しかしまさに徹底した模倣を意図しようとする嵯峨朝を転換点に、平安朝文学は唐のそれとは異なる方向へと歩みはじめたのである。このような変化はなぜあらわれたのか。その具体的な変貌のありようと要因を究明するには、文学作品の内面世界とその外部に揺曳する歴史の文脈とをむすびつけて検討するのが、肝要なことであろう。

## 五 本書へのこだわり

以上のような問題意識にもとづき、本書は三部構成からなり、奈良朝天平期から平安朝にいたるまでの文学史を視野に入れつつ、古代日本における中国文化の受容の様相および宮廷文芸と漢詩の関係について考察してみる。このような枠組みの設定をしたのは、先述したように、古代日本における中国文化や文学の受容は平安京の遷都によって隔絶されたのではなく、むしろ唐風政策の強化にとともに、一貫性を保っているものであって、平安朝の漢文学は、奈良朝天平期以来のゆたかな伝統を受けつぎながら成長を遂げたものと考ええるからである。

I 「奈良朝天平期における風流の受容」では、天平期の文献にはじめて出現した「風流」の問題にスポットをあて、盛唐の「風流」と対照させながら、同時代的文化受容の可能性を提示していきたい。

八世紀前半に集中的にあらわれた漢語「風流」は、訓読の問題とからんで、奈良朝宮廷文化の構築における機能や後期万葉の歌風への影響などの視点から、さまざまな論考が積み重ねられてきた。だが、これまでの研究では六朝ないし初唐の『遊仙窟』の風流の延長線上に位置づけられることが多い。こうした研究の現状を受け、第一章「風流と遊宴」では、諸文献における風流の用例を分析し、唐代にいたるまでの語義の変化を概観したうえで、風流の文化理念がいかに成立したかについて考察する。

第二章「風流と踏歌」は、宮廷踏歌の受容を手がかりに、天平期の風流と盛唐の風流の関連性について論じる。聖武朝では踏歌の主役が「風流有る者」（『続日本紀』天平六年二月一日条等）と評されたのは、盛唐宮廷の風流精神の影響を受けたことの可能性を指摘する。なお、本章は、古代日本における中国文化や文学の受容には、約五十年から百年のずれがあるとする従来の通説にたいする見なおしの試みでもある。

II 「平安朝の宮廷文学と省試詩」は、おもに平安朝と唐代の省試詩（試帖詩）の比較をとおして、両者の類似と相違を析出したうえで、平安朝の漢詩文芸と唐代のそれとの根本的な性格の違いを浮き彫りにするものである。

平安朝の文章生試における詩賦の導入は、いうまでもなく唐代の進士科試験にならったものである。したがって、具体的な省試詩の製作においても、唐の先例からの影響がじゅうぶん考えられよう。第三章の『経国集』の試帖詩考」と第四章の「平安朝における唐代省試詩の受容」は、それぞれ平安初期と九世紀後半における省試詩の受容のありかたを検証する。

第三章では、桓武朝では文章生試がはじまった当初、ほぼ唐の進士科試験と同じような出題基準が採用されていたことを新たに指摘し、かつその後の推移を追いながら、詩を課す文章生試は平安朝漢文学においてはいかなる意味を有していたかを論じる。

第四章では、唐代の省試詩題が平安朝の文章生試の課題だけでなく、宮廷詩宴の題にも借用されていることを明らかにしていく。平安朝の文章生試では、詩賦を同時に課する唐の進士科試験と異なり、精巧な構成を要する賦は試験科目からはずされていた。ところが、寛平二年（八九〇）閏九月十二日の宮中の作文会において、宇多天皇は菅原道真ら十二人の儒士たちに「未旦求衣賦」と「霜菊詩」、すなわち詩賦を一首ずつつくるよう命じている。こうした形式は唐の省試を再現したものであると指摘し、その基底にひそむ唐代における政治と文学のありかたにならおうとした宇多親政の意図を論ずる。

なお、ここでは両章の題名において、それぞれ「試帖詩」と「省試詩」を使い分けている理由について付言し

ておきたい。唐代では、開元二十四年（七三六）より進士科の試験が尚書省、礼部によって管掌されることになったため、「省試」とも呼ばれ、その答案の詩も「省試詩」と名づけられた。また、省試に「帖経」という課目（経書の一部を紙で貼り付け、その内容をあてさせる試験。「試帖」ともいう）がふくまれていることから、「省試詩」を「試帖詩」ともいう。

いっぽう、平安朝では文章生試が大学寮から式部省に移管されてから、「省試」と称されるようになったのは、唐例に準じたためと考えられる。ただし、式部省による文章生試の運営が確認できるのは、承和六年（八三九）が初見である。したがって、作品の性質じたいに違いがないものの、『経国集』所収の文章生試の詩作は厳密に「省試詩」といえないため、九世紀後半と区別して「試帖詩」と表記する。

つづく第五章「道真と省試詩」は、菅原道真の詩人の原点ともいうべき、文章生試に合格するための練習作を糸口に、白居易の詩や同時代の平安朝漢文学と照らしあわせながら、道真の詩人としての形成を問いなおす。とくに古体詩の創作意識の変化を通じて、詩人道真が平安朝漢詩史においていかに特別な存在であったかについて論じる。

第六章「夕霧の学問」は、これまでの各章とやや趣を異にし、『源氏物語』における文章道の問題をとりあげる。少女巻に現存の平安朝の記録類にも文学作品にもみられない、字をつける儀式が描かれていることに注目し、夕霧の学問の物語を歴史文脈のなかで立体的に浮かび上がらせて、その意味づけを試みる。さらに、その掉尾を飾る放鳥試について、寛平八年二月二十三日の宇多天皇の神泉苑行幸の先例を新しくつきとめ、撰閣政治の最盛期に生きながら、あえて虚構の世界において文章道の理想を語らずにはいられない物語作者の心意を透視してみる。

Ⅲ 「平安朝の宮廷文学と遣唐使」では、平安朝における重陽詩宴の受容のありかたに注目し、嵯峨朝と中唐の緊密な関係を明らかにしていく。学界の通念や常識にとらわれず、作品の内なる世界とそれととりまく時代の環境をたどりなおし、新たな文学交流史の可能性を提言する。

第七章「重陽詩宴と遣唐使」は、まず重陽詩宴がいつ、どのように日本に伝えられたかというところから出発し、唐の宮廷文学と同時代の遣唐使の動向を視野におさめたいうで、平安初期における重陽詩宴の伝来の経緯を説明する。年中行事のみならず、文学作品の場合もおおかたそうであるように、古くから中国にあったものが、いつの間にか日本に伝わったというあいまいで安直な認識を根底から問いなおす試みでもある。

第八章「嵯峨天皇と重陽詩宴」は、平安初期において重陽詩宴がいかに受容されたについて検証し、前章と対をなす。勅撰三集におさめられている二十四首の重陽詩賦をとりあげる。これらの作品において具体的に唐の宮廷文学をいかに摂取し、またどんな文脈をへてそこから離陸し、新たな境地を切り拓いていったかの過程を掘りおこし、「国風暗黒時代」における日本文学の特質の形成について論じる。

そして、本書をしめくくる終章「唐代と平安朝の宮廷文学」では、これまでの各論をとらえかえす視点から、唐代文学と平安朝文学の最大の差異である、和歌と散文における女性の重要性に注目する。中国では古来、名高い詩人や文学者がほとんど男性であるのになし、よく知られるように、平安朝では男性貴族だけでなく、紫式部や清少納言など女性による文学活動も活発であった。そのため、古代日本における女性作家の活躍を唐代文学の側からながめてみると、じつに特異な風景にみえる。じつさい、はじめ『源氏物語』や『枕草子』にふれたとき、多くの中国人読者が、「なぜ日本では、いちばん有名な古典の作品が、女性の手によって書かれたのか」と、不思議におもうのである。

ところが、宮廷文学という視点から唐代と平安朝を比較してみると、初唐から中唐にかけてやはり平安朝と同じように女性の活躍がみられる。彼女たちはいったいどういう顔ぶれで、そしてどんな作品をつくり、宮廷文学の製作にどうかかわっていたのか。また、平安朝とくらべると、唐の文学への影響は、平安朝の女流作家のそれとは共通した面があるのか、それとも相違のほうが大きいのだろうか。終章ではこれらの問題を念頭におきつつ、平安朝文学という鏡をとおして唐の宮廷文学をながめてみたい。その後にはふたたび平安朝文学に立ち返って、古代日本における女性と宮廷文学の関係を検証する。こうした従来の研究の枠組みから一歩はなれた、両者を相対化する作業は、より内側に踏み込んで両国文学の特質に接近するための試みであり、さらにそこから新たにどんな文学的、文化的展望がひらけてくるかについて考えるための足掛かりにもなるかとおもう。

注

- (1) 石母田正「日本古代における国家意識について——古代貴族の場合——」（同『日本古代国家論』第一部、岩波書店、一九七三年）。
- (2) 同じような見方は平安朝の侍宴応製詩においてもみられる。たとえば、大曾根章介氏は「公宴詩会の際の兼題擬作の詩が本義を外れたものであり、たとへ彫心鏤骨して麗句を配し衆人の賞讃を得たとしても、真の詩から遠く離れたものであることはあきらかであらう」と論じる（菅原道真——詩人と鴻儒——『日本文学』一九七三年九月、同『日本漢文学論集第二巻』汲古書院、一九九八年所収）。
- (3) 『清高宗（乾隆）御製詩文全集』（中国人民大学出版社、一九九三年）によれば、『御製詩集』と皇太子時代の『葉善堂全集』、没後に編まれた『御製詩餘集』の三集をあわせて、乾隆帝の詩作は四万三千六百三十首にもおよぶという。もつとも、臣下たちによる代作が多数ふくまれているが、しかしこうした君臣唱和の儒教的文学理念は、中国の王朝においては一貫したものとええよう。

- (4) 東野治之『遣唐使船——東アジアのなかで』（朝日新聞社、一九九九年）は遣唐使の出発時期が航海にいいとはいえない夏に多かったことに注目し、長安での元日朝賀に参列するために危険な船旅をしたと指摘する。なお、八世紀以降の遣唐使派遣の目的について、森公章『遣唐使の光芒 東アジアの歴史の使者』（角川学芸出版、二〇一〇年）は政治や外交ではなく、おもに唐文化の移入にあると説く。
- (5) 古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』（吉川弘文館、二〇〇三年）、大津透『古代の天皇制』（岩波書店、一九九九年）など。
- (6) 石田幹之助『元宵觀燈』（同『増訂 長安の春』東洋文庫、一九六七年）。
- (7) 和辻哲郎『古寺巡礼』（岩波書店、一九一九年）。
- (8) 風巻景次郎『古代詩と中世詩の間』（『風巻景次郎全集第五巻 和歌の伝統』桜楓社、一九七一年）。
- (9) 大津透『平安時代前期の中国化と遣唐使』（同『日本古代史を学ぶ』岩波書店、二〇〇九年）。また、鈴木靖民『遣唐使と古代の東アジア』（遣唐使船再現シンポジウム編『遣唐使船の時代——時空を駆け抜けた超人たち』角川学芸出版、二〇一〇年）も「九世紀前半期の遣唐使は、国際政治や唐皇帝との関係がほとんど顧慮されず、最新の仏教導入を主とする文化的、思想的な意義が大きかったことが特色である」と指摘する。
- (10) 桃裕行『平安時代初期の大学寮の盛容と大学別曹の設立』（同『上代学制の研究』目黒書店、一九四七年。『桃裕行著作集第一巻 上代学制の研究』思文閣出版、一九九四年）。
- (11) 小島憲之『国風暗黒時代——その時代区分をめぐって——』（同『国風暗黒時代の文学中（上）』塙書房、一九八六年）。
- (12) 神野藤昭夫『近代国文学の成立』（酒井敏・原国人編『森鷗外論集——歴史に聞く——』新典社、二〇〇〇年）、同『近代国文学から国際化時代の日本文学研究へ——日本文学像はどう捉えられてきたか——』（跡見学園女子大学『人文学フォーラム』第四号、二〇〇六年）、河添房江『国風文化』の再検討（同『源氏物語と東アジア世界』日本放送出版協会、二〇〇七年）など。
- (13) 藤原克己『承和以前と以後の王朝漢詩』（同『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年）。

sample